

# Nara Women's University Digital Information Repository

Title	家族と家庭をめぐる臨床心理学的考察：domesticが意味すること
Author(s)	黒川, 嘉子
Citation	奈良女子大学心理臨床研究, 第2号, pp. 41-46
Issue Date	2015-03-31
Description	
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/4107">http://hdl.handle.net/10935/4107</a>
Textversion	publisher

This document is downloaded at: 2017-10-21T10:14:12Z

# 家族と家庭をめぐる臨床心理学的考察

— domestic が意味すること —

黒川 嘉子

(奈良女子大学大学院生活環境科学系臨床心理学領域)

要約：家族形態が多様化し、複雑化するなかで、深刻な家族の問題が臨床場面でも訴えられる。「家族とはなにか？」という問いは、家族に対する主観的体験や文脈を共有する人間関係の中で意味が生まれるという臨床心理学的特徴をもっている。そこから、社会的存在の基盤となる家族 family の機能、生活をともにし、ともに存在する場である家庭 home の機能を考察し、さらに、DV (ドメスティックバイオレンス) に代表されるような破壊的な作用も家庭を表す言葉 domestic にはあることを明らかにした。それらを踏まえ、家族が機能するために、家族が孤立するのではなく、社会的存在として成立し、家族と共同体を両立させるあり方について考察を深めた。

キーワード：家族 family, 家庭 home, 家庭的 domestic, 社会的存在

## はじめに

初対面の人と出会うとき、まず自分の名前を名乗るところから始まるであろう。3歳を過ぎた頃から、親からの呼び名や愛称だけではなく、「〇〇(姓) △△(名)」と家族を表す名字とともに自分を示すようになる。他の誰でもない自分を表す最たるものである名前に、「家族」が含まれており、臨床心理面接においても、クライアント個人についての理解を深めるためには、家族についても丁寧に扱っていくことが不可欠である。しかし、「家族とはなにか？」と問うとその答えは難しい。

社会の変化とともに、人の生き方、価値観も変化していく。社会問題となっている非婚化、晩婚化、少子化、そして、離婚や再婚の増加、生殖医療の普及などにより、夫婦や親子の関係も複雑化し、家族の形も多様化してきた。そうした中で、児童虐待、ドメスティックバイオレンス、家族内殺人など、家族あるいは家庭の問題も深刻化している。今あらためて、“家族”を捉えなおしてみることは、日々の臨床実践をおこなううえでも急務なことのようと思われる。

## 家族の定義

まず一般的な理解として、家族とは“夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の

単位となる集団。近代家族では、夫婦とその未婚の子からなる核家族が一般的形態”とされている(松村, 2012)。しかし、夫婦という婚姻関係にしばられるのか、単親の場合はどうなのか、血縁関係のない親子関係もあるのではないかと、単身赴任など別居生活をしている場合は共同生活の単位をなしているとは言えないのではないかなど、たちどころに実際の家族とのずれに気づかされるであろう。

中釜ら(2008)は、“難易度の高い定義だが”と断ったうえで、“きわめて現代的なものとして、家族とは、人々の間に流布する言説(ディスコース)によって社会的に構築されるもの”という一文をあげている。言葉で表される1つの現象に、何種類かの一般的理解が存在するが、話されている文脈によって、そのうちの何を意味しているのかが決まってくるというものである。どんな文脈で語られたのか、その文脈を共有する人々の間にどんな共通理解が生み出されるのかということによって、家族という言葉が意味する内容が異なってくることを示している。

法律上でも、民法において、親族(第725条：1. 六親等内の血族, 2. 配偶者, 3. 三親等内の姻族)と扶養義務(第877条)について定められているが、家族というものの定義はない。これら

のことから、家族を捉えるためには、「その人にとっての家族」という視点が必要であり、クライアントの主観的体験や語りを中心に置き、クライアントとセラピストの対人的コミュニケーションのもとで意味を見出していく臨床心理行為の本質ともつながっていることがわかる。

### 家族：family

家族を表す family は、ラテン語の famulus (servant, slave) から派生した familia が語源とされる(石塚・柴田,2003)。それによると、ローマ帝国において権力を持つ家長とその妻、子ども、奴隷からなる共同体をさしていた。こうした人的な団体と、土地および動産の物的基礎から成立し、最年長者の系統の最年長男子の専制的権力に服従することによって保持されるものとされていた。日本においては、明治期に family の訳語として「家族」があてはめられたが、明治民法の家制度で示された「家」に近い。そして、戦後、家制度が廃止され、血縁関係にもとづく情緒的な融合をもった共同体という意味合いが込められて語られるようになったとされており、現在の家族イメージは、70年ほどの中で作られてきているのである。

河合(2004)は、日本の家族の問題について述べるなかで、こうした家制度で示された明治期以前の「家」について、カタカナで「イエ」と表し、家名の存続を第一義と考えて生きていたあり方から、戦後、敗戦を経験し、欧米の文化から影響を受け、「イエ」の束縛から逃れ、「個人」を大切にしようとする考えに変わってきたことを挙げている。家長は、長男に引き継がれ、長男は「イエ」を担っていかなければならない。特別大事にされ優遇されるが、「イエ」から逃げられない不自由さを強いられる。長男以外の男子は、同じ子どもであるのに、「イエ」のために長男に仕える立場になる。重責を押し付けられないという身軽さはあるかもしれないが、対等に扱われることはない。また、女性は、男性とはまったく異なる立場や役割で「イエ」に仕えることになる。つまり、出生順位や性別という本人によるところではない理由から、みずからの立場、役割が決められてしまうあり方から解

放され、個人の自由や平等が尊重されるようになったのである。

そうは言っても、完全に自由になり、本人の意思や判断だけで個として生きていかれるわけではない。先にも述べたが、自分という存在を表すときには、家族の名 family name がついてくる。ある6歳の男児が、冬休み、母方祖父母の家で、母方のいとこ達と出会い、一緒に楽しく遊ぶことがあった。これまで1,2度会ったことはあるものの、男児の中では、いとこは、同じ名字をもつ父方のいとこの姿しか理解していなかった。母方いとこ達との楽しい時間を過ごし、別れた後、彼は、「〇〇族(自分や父方の family name)と□□族(母方の family name)と一緒に写真撮りたいな」と目を輝かせて言ったのである。奇しくも、血縁関係のある、同じ祖先をもつ人の集まりとして「族」という言葉を用い、自分という存在は、父方の「族」と母方の「族」から成り立っているということを実感もって体験したのであろう。

このように、家族 family には、その個人の土台となり、社会的存在として人と関係を築くときの支えとなる機能もある。ただし、両親がそろっていて、親戚づきあひも大きな問題を抱えていないかのようにみえる健全そうな家族であることが、子どもにとって意味があるわけではない。子どもの心理臨床にたずさわっていると、親の離婚や再婚により、名字が変わるという体験をする子ども、虐待など背景はさまざまであるが、自分の出自がよくわからないという子どもと出会うこともある。親がいて、家族という形は成しているが、束縛する「イエ」というものそのものが無いかのような子どももいる。河合(2004)は、個人の尊重という流れのなかで、個人を国や公で守っていこうという社会システムが発達し、家族の役割も希薄になってきていることを指摘したうえで、人生には、自分ではどうにもならない運命的な部分(血のつながり)と、自分自身の意思や努力などによる部分の両方の要素があり、そのどちらを大事にしていくのか、あるいは、両方を大事にしながら、どのように折り合いをつけていくかが重要になるとしている。それは、自分が生まれた家族と、こ

れから自分が意識的に選択的に作る家族との折り合いをどのようにつけていくかというテーマとつながる。非婚化や晩婚化という問題は、変えようがない自分が生まれた既存の家族と、自分なりに新しく作っていく新設の家族の結節点の問題ととらえることができるかもしれない。ただ、自分の意思や自由が認められるところとなっても、パートナーとなりうる異性と出会うかどうか、そのパートナーと家族としての関係が維持できるかどうか、子どもが授かるかなどは、みずから完全にコントロールできないものでもある。何か確固としたものがありそうな家族 family ではあるが、そこには“どうにもならなさ”という要素が含まれているという面を見落としてはいけないのではないだろうか。それでは、その人を支える土台となる家族の機能とは、どのようなものであろうか。

#### 家庭：home

自分の存在を支える家族を考えると、心の安全基地である home (家庭) としてとらえることもできる。家庭とは、「夫婦・親子などの関係にある者が生活をともにする、小さな集団。また、その生活する所」である (松村, 2012)。まさに生きることをともにする集団という意味である。家族 family が、制度やシステムのうえに成立するという特徴を有するとすれば、家庭とは、生活をともにするという体験過程に焦点があてられている。先の6歳の男児の発言にあるように、異なる「族」がともに生活することを通して、家庭を築き、新しい家族となっていくのであろう。

霊長類学者である山際 (2014) は、家族みたいな集団として、「共鳴集団」というものを挙げている。たとえばサッカーやラグビーのチームのように、日々顔を突き合わせ、体を同調させて暮らしていると、お互いが、どういう動きをすれば自分に何が求められているのか、どういう目配せでどう動けばよいのかなどが分かり合える言葉のいらぬ集団となっていく。そして、山際 (2014) は“それが人間の基本的集団”であると明言している。そこでは、血のつながりがあるかどうかということは重要でなくな

る。寝食をともにするという身体機能も含めた生活そのものにおいて、時間や体験をともにすることを通して、強い信頼関係を築いていくのである。

こうした身体レベルの言葉ではないコミュニケーションを通して信頼関係を築いていく過程は、まさに人生の出発点である、乳児期の乳児と母親 (養育者) の関係性からみることができ。Erikson, E.H. (1989) が、最初の心の課題として“基本的信頼感 basic trust”を挙げているところである。母親は、乳児の泣き声の微妙な違いに対しても、勘をはたらかせ、お腹が空いているのか、オムツが濡れているのか、何を求めているのかを探ろうとする。Winnicott (1956/1990) の“母親の原初的没頭 primary maternal preoccupation”で示されている母親の感性によって、ほぼ適切に対応できるとされるが、当然、どうして泣いているのか、乳児が何を求めているのかわからないこともある。自然と「ミルクが欲しいのかな?」「あらあら、気持ち悪いの?」など乳児の気持ちを察して言葉にしながら抱き上げ、それに対する乳児の表情や動きを見て「やっぱりそうだったのね」「どうも違うようだけど、どうして欲しいの?」と母親自身の言葉も発している。つまり、視覚、聴覚、触覚、嗅覚などの感覚を総動員してかかわってくる母親に対して、乳児の側も母親の姿を見て、声を聴いて、抱かれる感触を味わい、母親の匂い、ミルクの匂いを嗅ぎ、ミルクを味わうなど、乳児と母親のかかわり合いは、互いの感覚器官を通じた相互作用なのである。

また、上記のような母親の関わりは、乳児の欲求を充足させるために行動しているだけでなく、乳児の「気持ち」を汲み取ろうとして心を働かせていることが明らかである。まるで、どんな幼い乳児であっても母親と同じように、何かしらの内的世界、「こころ」を有していることを前提としているような関わりである。Emde (1983) は、喜び、驚き、恐れ、悲しみ、嫌悪、興味などの基本的情緒 (basic emotion) は、人が持って生まれる生物的資質であることを、国際比較研究によって示している。年齢や文化、人種の違いを越えて、人と人とのあいだでは、互

いに共通する情緒を基盤として交流をもつことができる。これを情動的中核 (affective core) と呼び、“私たちが人である他者を理解できることを保証するものである”と述べているのである。乳児にもこうした情動的中核が存在し、それによって母親との情緒的交流が可能になると同時に、乳児自身の体験に連続性を与えるものであることを示している。また Stern (1985/1989) も、乳児は、人との出会いによって直接起こってくるカテゴリー化されないような生氣情動 (vital affect) を感じるとる無様式知覚という能力を備えており、母親とのあいだで生じる情動レベルでのやりとり、情動調律を繰り返していることを詳細に示している。

こうした生身の相手との時間をかけた相互作用を通して、信頼関係に裏打ちされた「阿吽の呼吸」が可能になる。何か嫌なことや悩みを抱えている時でも、打ち明ける前に相手が勘づいてくれる。あるいは、わかってきている、いざとなったら支えてくれると思える相手がいるだけで、大丈夫と思える関係性である。相互作用と表すと何かをする (doing) の関係のようであるが、ここでは、ただ在ること (being) (Winnicott, 1965/1977) に重点があり、その場が家庭 home と言えるのかもしれない。

### 家庭的 : domestic

言葉のいらぬ関係、情動 affect や情緒 emotion による関係が、人間の基本集団を形成するにも関わらず、子育て支援の場などで訴えられる育児不安には、勘や感受性、センスといった目に見えず、明確な基準のないものへの不安や、不確かなもの、あてにならないものへの否定的感情が見え隠れする。言わずもがな、科学技術の進歩によって、速く、正確にできることが格段に増え、また情報化社会により、さまざまな情報を得ることができる一方で、どの情報を信じるのか選択に迫られる。心の領域においても、どういう条件で、どういうふうに関われば、どういう結果になるということを確証 evidence をもって示すことが求められるようになった。そうした社会環境の変化の中で、たとえば、乳児がおしっこをしたかどうかは、匂い

や濡れた感触ではなく、紙オムツのセンサーの色の変化を見ることでわかり、お風呂のお湯加減は、手を入れて確かめるより、水温計が39度、40度を指していることの方が確実であるというふうに、近くに寄って目の前の相手の様子を見ることや自分の直接の感覚を頼りにすることが、知らず知らずのうちに減ってきているのも事実である。生活をともにすることだけでは、阿吽の呼吸は生まれず、家庭 home が機能しなくなっているのかもしれない。

では、家庭的になるにはどうすればよいのであろうか。家族内、あるいは本来、信頼関係のうえに成り立っている恋人やパートナー間におけるドメスティックバイオレンス (Domestic Violence) は、深刻な問題であるが、domestic という語は、家庭の、家庭的なという意味だけでなく、野生の動物などが飼い馴らされた、家畜化されたという意味を持っている。反対語として wild が挙げられており、野育ちの、自然なままの、野蛮な生き物 (植物も含め) を、人間にとって都合がよいように手なずけるという意味を含んでいる。つまり、ドメスティックバイオレンス (Domestic Violence) とは、相手のありのままの状態を認めず、自分の思い通りに手なずけようとして、暴力 (精神的なものも含め) をふるい、みずからが荒れた野蛮なものになってしまう行為なのである。虐待においても、言うこと聞かない子どもに対するしつけであると主張する親は少なくない。母子間の情動調律においても、Stern (1985/1989) は、ミクロなレベルでおこなわれる相互交流ゆえに、誤調律や過小調律、過剰調律、選択的調律などによるリスクを指摘している。乳児が母親から適切な調節を得られない場合、何とか母親と「共にある」感覚を創り出そうとして、乳児本来の調子ではないかきりそめの調子で合わしたり、本来の調子とのズレは処理されないまま独りで抱え込むことになったりする。言葉のいらぬ身体をも含んだ親密な関係だからこそ、暗黙のルールが作られていき、時として、破壊的な方向に向かう可能性があるのである。

DV や児童虐待をはじめ家庭の中での問題は、外からは非常に見えにくいもの、わかりにくい

ものである。山際(2014)は、家族をもつが共同体は形成しないゴリラ、共同体を形成するが家族をもたないサルとの比較から、“共同体があっても人間ではない。家族だけがあっても人間ではない。その二つがなければ、人間性を発揮することはできない”としている。そして、“家族は孤立しているわけではなく、周囲から家族として認められて初めて家族になるものである”と述べている。さらに、言葉のいらない身体的つながりの代表である母子関係ではなく、父親という存在について、男性が自覚的に父親になるうとしてもなれるものではなく、また、自分の子どもを生物学的に見分けることができない。そのため、母親と子どもからだけでなく、周囲から、「あなたはこの子の父親ですよ。」あるいは子どもに対して「この人はあなたのお父さんですよ」と幾度となく言われることによって合意を得て、ようやく父親という社会的存在が成立すると指摘していることは非常に興味深い。山際(2014)は、こうした父親という“文化的な装置”をつくることによって、生物学的な血縁によるのではなく、親として振る舞う父親と母親を可能にしたとしている。

つまり、家族として機能する、あるいは家庭が機能するためには、言葉のいらない二者関係をベースにした、互いが鏡となり、主客が反転することも含む閉じられた関係性だけでなく、家族というものを対象化し外側から眺める三者関係のあり方を両立させる必要がある。それはちょうど、言葉のいらない関係、あるいはその関係のなかだけで通じる隠語を用いる関係でありつつ、family nameという外側に対する名前をもつことで、自分という存在が成り立つところと相似形をなしている。domesticateという動詞が示している、野生の動物や植物を、人間の環境へと適応させていくためには、動植物の特性と、適応させる環境の特性の双方について、それなりの知恵や技能がいる。家という場があり、人がただ在るだけでは機能しなくなっている今、環境がどのように変化しているのか、そこに適応するとはどういうことなのか、真剣に考えないといけないのは当然のことと言えるであろう。

## 「うち」と「そと」との結び目

山際(2014)は、家族と共同体という二つの組織をつなぎ合わせるのは“共感”であり、現代社会において、この共感力が衰えてきているのではないかと述べている。家族とはえこひいきの組織であり、一方、共同体では、互いに家族とは違うルールで共存し、何かをしてあげるとお返しが来るという互酬的で、かつ対等な立場で付き合う社会組織であるとし、どちらか一方を優先させると矛盾する利益のため、他方が成り立たなくなる非常に難しい社会技術を必要とするとしている。山際(2014)の言う“共感”とは、そのような中で、相手は何を感じ、何を自分に望んでいるのか、自分がこういう行動をしたら相手はどう感じるのかということや常にモニターし、推しはかる能力である。そして、この能力は、親が子どもを育てるだけでなく、他人が子育てにかかわり共同保育するなかで育ち、大人の間の社会関係にまで普遍化したとしている。

こうした体験世界は、幼児期の子どもが、ある程度自分中心に動いていた家庭から、共通のルールが存在する社会集団に参加する体験世界とパラレルではないだろうか。はじめに3歳を過ぎたころから、自分という存在を表す際に、姓 family name と名 first name を言えるようになることを示した。父親という存在が、父親-母親-子どもという三角関係を生み、社会的規範や道徳心、良心の形成につながると思われるエディプス期に参入する時期でもある。相手の立場に自分の身を置いて考えることができ、思いやる能力を身に着けていく。幼児期の子どもたちは、空想やファンタジーが膨らむ内的主観的世界を生き生きと体験していると同時に、少しずつ、他者と共有可能な現実感覚を身につける過程にいる。砂場での遊びや積み木遊び、作品作りなどを通して、内的世界を外的なもので表現させていたり、ごっこ遊びなどを通して、個々の内的なイメージを外側にいる他児と共有しながら、「つもり」や「ふり」を本気で演じ切るなど、「うち」の世界と「そと」の世界を柔軟に行き来しているのである。

幼稚園での保護者カウンセリングや保育者へのコンサルテーションなどの臨床実践を通じて、「うち」と「そと」との両立が困難になっているのは、子どもではなく大人の方であることが多い(黒川, 2014)。社会的責任を担う大人が子どものように遊ぶことは難しいであろうが、生産性や効率性、合理性などとは異なる価値基準を見落としてはいけないのではないだろうか。たとえば先述の「親として振る舞う」ということも、「つもり」の延長上ととらえることができる。それによって何か見返りや利益を第一義には求めない、求められないものでもある。結婚も子育ても、そして介護も、見返りや損得の基準を入れると、途端に成り立たなくなる。遊ぶことが、それ自体が目的であるように、家族であることも、それ自体で何らかの意味をもっていると考えると、深刻化する家族の問題を、もう少し創造的に取り組んでいくことができるのかもしれないという期待感が生じる。

#### おわりに

奈良女子大学の臨床心理学コースは、生活環境学系に設置された。家政学(domestic science, domestic arts, domestic economics / home economics)部を母体としたところに、臨床心理学の学びと実践の場が創られたことは、偶然のことではないであろう。今年度、1期生を迎えたばかりであるが、学生や院生、臨床心理相談センターのスタッフたちともに学び、充実した時間を過ごす中で、彼女たちのhomeとなることができたらと願う。

#### 引用文献

- Emde, R. N. (1983). The Prerepresentational Self and Its Affective Core. *Psychoanalytic Study of the Child*, 38, 165-192.
- Erikson, E. H. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳)(1989). ライフサイクル, その完結 みすず書房
- 石塚正英・柴田隆行(2003). 哲学・思想翻訳語事典 論創社
- 河合隼雄(2004). 父親の力 母親の力—「イエ」

- を出て「家」に帰る 講談社
- 黒川嘉子(2014). 子どもの幸せにつながる保育者と保護者の関係 佛教大学臨床心理学研究紀要特集号 幼稚園カウンセリングの実際 pp.17-27
- 松村 明(監修)(2012). 大辞泉 第二版, 小学館
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子(2008). 家族心理学—家族システムの発達と臨床的援助 有斐閣ブックス
- Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳) 神庭靖子・神庭重信(訳)(1989). 乳児の対人世界—理論編
- Winnicott, D. W. (1956). Primary Maternal Preoccupation. 北山修(監訳)(1990) 最初の母性的没頭 児童分析から精神分析へ ウィニコット臨床論文集Ⅱ 岩崎学術出版社
- Winnicott, D. W. (1965). The Maturation Processes and the Facilitating Environment. 牛島定信(訳)(1977) 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社
- 山際寿一(2014). 人にはどうして家族が必要なのでしょう 考える人 No.51 pp.28-52 新潮社